

第13回村野藤吾賞受賞作品について、

牧野富太郎記念館 内藤 廣

この作品は、高知出身の植物学者 牧野富太郎博士の残された膨大な植物標本と書籍、そして大量の見事なスケッチ等を収蔵し、広く公開するとともに研究に資するための施設である。

高知市郊外の五台山の尾根に沿う斜面に建てられている。

1992年に竣工した「海の博物館」で大きく注目を集めた内藤氏の近作の中でも、特に高い評価を得ている作品である。

林業県として有数の地位を確保するこの県当局から、木造であることが求められたと聞く。この条件を前提として、この計画地の自然と地形の中では、氏の他の近作に見られるような、全体を分節化しそれを統合するという方法では対応できないとして、うねるような不整形を求め、それを平面的に線形に延ばすのではなく、有機体のように集約するふたつのブロックとしてこの山頂近くに配し、極力造成域を小さくしている。しかも、一般の建築に見られるように、周辺から建築が孤立しがちになることを嫌って、建築が環境と景観に積極的に還元されることを目指している。それは文節的な考え方とは逆に、全体を一体のものとして扱い、そのフレキシビリティを地形に沿わせつつ、台地と一体化した外周構造のRC壁による空間と、その結果発生した中庭が主役である。その中庭は、内部空間と周辺空間との交流をダイナミックに調整する柔らかい器官となる。地と森に埋まる壁は台地の一体感を生み、屋根は台地への指向を見せ、それらが発生させる内外の中間域となる中庭は、天に開き、森との一体感を結実し、柔らかな風を内部と外部の環境に横断させる呼吸器官のようである。

昨年暮れ、氏は新建築誌上で、この計画のための基本的思想を論じた。

“建築は孤独だ”と言う。“建築は内部環境の性能を追及するあまり、結果として外界に対してその外皮を厚くし、さらにそれを幾重にもめぐらして外に対してその殻を閉じてしまった。ガラスの大開口も、外部環境の影響が内部に伝わらないようにガードを固める。建築は自然系から自らの系を弧絶させる。建物の周りの植栽も体のいい周囲に対する媚びに過ぎない。その閉じ込められた透明の箱は息をしない・・・”と言う。

牧野富太郎記念館は、木造で山の上に建っている。ここでは、自然の風のことを考えないと成立しない。細部から地域や景観といった広範な分野までを横断するメタファーとして風を扱うべきだと、設計当初から想像したと語る。

新旧の世紀の節目にあるいま、私たちは多くの課題に直面している。バーチャルな環境が実感の領域を圧迫しかねない不安も見え隠れしている。生き生きとした精神をもって自然の姿に感銘し、その膨大な作業に生涯を捧げた自然科学者げのパッションとも言える情熱の重要な痕跡と共演する建築の秀作に、高い評価を惜しまない。

2000年3月1日

村野藤吾賞選考委員長 池原義郎